

日本紀竟宴和歌の左注と書紀の訓読

西宮 一民

一

日本書紀の進講が終って竟宴が催された際、紀中の主要人物を探り、それを和歌にして詠進したものを「日本紀竟宴和歌」といふ。

いま、熊本本妙寺蔵の『日本紀竟宴和歌』（上下二巻、鎌倉時代写、昭和15年古典保存会複製、山田孝雄博士解説）をみると、序文（漢文）は別として、例へば、

得国常立尊

の如き、書紀中の誰を詠歌対象にするかといふ△題詞▽がはじめにあって、次に、

從五位下大学頭藤原朝臣春海

の如き△作者名▽があり、次に、

葦牙廻那微能幾佐斯裳度保迦羅須阿麻都比津機能波志米度母弊

波

の如き、万葉仮名で記された短歌があり、次に、

あしかひのなみのきさしもとほからすあまつひつきのはしめと

もへは

の如き、平仮名の△訓下し▽があり、次に、

あめつちひらくるはしめうかひたたよへるなかにひとつのも
のあり……

の如き、その歌の解説などを平仮名で記した文章がある、といふ体裁になってゐる。わたくしは、この最後の「解説的な文章」を指して、△左注▽と呼ぶことにする。この左注の文章の検討から生ずる問題について考へようとするのが本稿の目的なのであるが、事前に処理すべき問題がかなり多いので、先づ「和歌」についてみておかう。

和歌は、元慶六年（八八二）度のもの二首、延喜六年（九〇六）度のもの四〇首△以上、上巻▽、天慶六年（九四三）度のもの四一首△以上、下巻▽、計八三首ある。以下説明の便宜上、「上1」「下83」とか記すのは、上巻の歌番号1番、下巻の歌番号83番の謂としておく。

今日の本妙寺本は鎌倉時代の写本と謂はれるが、多少の誤写等があるにせよ、ほぼ原本の姿が伝へられてゐるものとわたくしには思はれる。和歌についてみるならば、

(1)元慶の二首（上1・2）は、元慶のものであるといふ確証は無いが、またそれを否定する理由も無い。

(2)延喜の四〇首(上3142)は、ア行のエとヤ行のエとが書分けられてゐるので、国語史上この書分けがなされてゐるのは、醍醐天皇延長八年(九三〇)以前とするのと適ふわけで、延喜の歌と認めてよい。それらの例は、

ア行のエ……上31衣。弓之支美奈利(えへ得てしきみなり)

ヤ行のエ……上11幾裔奈麻志(きえへ消なまし)・17要多(えたへ枝)

である。もちろん、ワ行のエと混同した例は無く、またオとヲの別も明かである。

(3)天慶の四一首(下43183)は、

ア行のエ……下53都摩遠衣天(つまをえへ得て)・78衣都留賀

那(えへ得てつるかな)

ヤ行のエ……上43古江天出曾(こえへ越てこそ)・77多裔勢数

(たえへ絶せず)・79裳江万散留賀奈(もえへ燃まさるかな)

・80散嘉江計流(さかえへ栄ける)

の如く、二つのエを書分けてゐる例がほとんどにしても、下68多愛努那利氣理(たえへ絶ぬなりけり)の如く、ヤ行のエをア行のエに混同してゐるのは、やはり天慶のものであることを示してゐるのである。あまつさへ、

下51飛止爾古恵太留(ひとにこえへ越たる)

の如き、ヤ行のエをワ行のエに混同するが如きは珍しい例ではあるが、個人的な誤差もあったものと認めるならば、天慶のものとも認め得よう。オとヲとの別は明かである。

以上、八三首の和歌は、元慶・延喜・天慶の三代のものを、そのまま残してゐるといふことが、仮名遣の面から言へると思ふのであ

るが、それも作者七四人といふやうに、個人差が顕著であるべき文字遣において客観的に得られた結果であるから、そのことが認められるのであつて、天慶以降において、誰かによって、これらの八三首が書下されたものではないことを意味してゐる。つまり、歌そのものは資料のまま採録されたのだといふことができるのである。しかるに、源高明の『西宮記』をみると、

土倉能綱尼駕駕令流鷹狎野繫絆手无解由(前三河守菅野高松)

誰裳子之無香有時波棄身底虎野舌切名祖館奴壁(左兵衛權佐藤

原忠房)

駕祖色馬如何尼憐度思藍三年尼鳴奴足不立子手(民部大輔大

江朝綱)

の三首が挙げてある(増訂故実叢書『西宮記』第二、二七一―二七二頁)。著者源高明は天慶六年の竟宴には、三十歳であり、宴に列して「得天命開別天皇」と題する和歌一首(下77)を詠じてゐるのであるが、それは一字一音の仮名表記である。

従つて、西宮記の成立年代を、著者没年の円融天皇天元五年(九八二)として、果して西宮記所載の竟宴和歌の表記法が原形なのか、或いは本妙寺本の表記法が原形なのかといふ問題になるわけである。ここで、西宮記の表記をみると、「无解由」「棄身」「不立」の如き漢文の語順によるもの、「狎」「無香」「館」「色」「鳴」の如き二音節以上の借訓、また「壁」「藍」の如き二音節の借音が用ゐられてゐるが、三首とも共通した特異な表記法である。

それに較べると、本妙寺本の方は、作者七四人中、原則として一字一音の表記法をとるが、中には人によって、上4葦牙・22四年之間

解由無之・24見別：君：御世・27恋：鶴・29堤：豊浦宮：世々：水
・32日月：行：星躔：新羅乃国・41甘樫乃丘・下43八嶋乃国・55伯
孫：埴爾馬作之時：器・72菅田・73大：大津父・79大鷦鷯の如く表
意文字を用ゐたり、また上7・8・下49・74などの如く特にむつか
しい文字の用ゐたりするように、個人差が認められるのである。

このことは、西宮記の表記が原形ではなくて、本妙寺本が原
形であり、西宮記の著者が自分の用字の好みに合はせて資料を書直
したものとみるべきことを示してゐると考へられる。さらに、八三
首、七四人の作をもし本妙寺本の如く書改めたものとするならば、
前述の如き、延喜と天慶との仮名遣が截然と区画されるやうな結果
をもたらすことはなかったであらうと思はれる。

ただし、竟宴和歌の資料としては、本妙寺本が唯一のものではな
く、現に西宮記の三首のうち、第一首は作者・作歌年代・歌詞に大
差があり、また第二・三首にも歌詞に小異があるといふやうに、他
の資料も存在したと認められるから、或いは西宮記の如き表記法以
外の表記がなされてゐたものもあつたらうといふことは十分考へら
れてよい。しかし、西宮記の方に、より多くの採録者の表記があら
はれてゐるとみる方が自然であらう。

かくして、本妙寺本は元慶・延喜・天慶の和歌を、仮名遣にいた
るまで温存してゐるものとみなすことができよう。さて、そこで、

得豊御食炊屋姫天皇

右大弁從四位上兼行侍從備前權守藤原朝臣忠平

堤乎波豊浦宮爾都畿曾女豆世々乎部奴礼止水波毛良佐湊(上29)

について検討しておかねばならない。これを推古紀に照してみる
と、

皇后、即天皇位於豊浦宮(即位前紀)

作掖上池・畝傍池・和珥池。(廿一年冬十一月条)

とあるのみだから、和歌の内容と完全には合はない。藤原兼輔撰の
『聖徳太子伝暦』には、

水田之本、在於池畝……興民築池……冬十月、倭国作高市

池・藤原池・肩岡池・菅原池・三立池・山田池・鎌池……諸国

遣使築池(十五年条、続群書類従、第八輯、伝部『聖徳太子

伝暦』卷下、24頁下段)

とあつて、歌の内容にやや近くなる。しかし、伝暦の成立は延喜一
七年(九一七)であり、藤原忠平(八八〇〜九四九)が延喜六年に
詠進した当時にはまだ伝暦が成立してゐなかつたわけである。そこ
で再び推古紀に戻ると、「池を掘ることは堤を作ることを伴なうと
いうのは理くつだが、歌の発想にいう論理をめぐらしたと考へ
てよいかどうか」といふ懷疑説(収本太郎博士「日本書紀の本文研
究」『日本古典文学大系』月報、昭和42・3)もある如く、推古紀
から直ちに忠平の歌ができたとも思はれない。それに対して、伝暦
の方は「陂」「築池」と、歌の「堤をば豊浦の宮に築きそめて」
と、少しは関連をもってくるといふことはいへよう。ところが前述
の如く、伝暦は未成立である。

しかし、わたくしは、この伝暦の原資料になるものは、当時存在
してゐたのではないかと想像する。いま藤原氏の系図をみると、

冬嗣

良房—基経—忠平—師尹

(880—949) (930—969)

良門—列基—兼輔

(877—933)

となるわけで、忠平が原聖徳太子伝暦的なものないしはその資料を見なかったとはいへないのであって、いったん伝暦が成立してみると、忠平の第四子師尹は天慶の竟宴において、

得聖徳太子

佐支瑱保敷波奈乎者於幾弓登与止美己万津爾者見万湏伊呂那賀利介里(下64)

の如く、日本書紀にも上宮聖徳法王帝説にも靈異記にも聖徳太子伝補闕記にも何本にもなくて、この聖徳太子伝暦にのみ伝える記事から題材を選ぶといふことがおこつてゐるのである。従つて、忠平が用ゐたのは恐らく原太子伝暦的或いは資料的なものであつて、そこには多少の創作も入れて作歌したものと思はれ、その子の師尹は太子伝暦そのものを用ゐたといふことになるわけである。

かく考へれば、依然として、元慶・延喜・天慶の和歌そのものは、それぞれ当時のものと認めることができるであらう。

二

では次に、右の和歌八三首にはおのおの平仮名による訓下しがついてゐるのであるが、これについてみると、歌の△作者▽と、その△訓下し▽とは全く別人であることがわかる。万葉仮名を忠実に平仮名に直してゐるのではあるけれども、

上6美知波袁志弊祀(みちはをしへて)・24墨毛見別奴(すみをみわかぬ)・32加知波可和可之(かちはかはかし)・下51飛止爾古恵太留(ひとにこえたる)・67於夜仁佐利氣留(おやにそありける)

の如く、異なる訓みがある。もし作者が訓下したものでなら、かかる現象は生じなかつたはずである。このうち、仮名遣の面では、「可和可之」が正しいのに「かはかし」(不乾)と誤り、「古恵太留」の誤りを「こえたる」(越)に訂してゐるのである。

次に、和歌と訓下しと左注との関係を見ると、右の「かはかし」は左注にも「かはかす」とあるから、要するに△訓下し▽と△左注▽とは同一の人物の手になるもので、和歌の作者とは全く別人であることがわかるのである。また例へば、

賀羅古呂裳下照姫能勢那恋曾阿女仁幾古遊留鶴奈良奴禰波(上27)

からころもしたてるひめのせなこひそあめにきこゆるつるならぬねは

したてりひめはあめわかひこのめなり。そのをふとうせたりときかなしぶこゑそらにきこゆといへり。またからのふみにつるさわにないて、こゑそらにきこゆといへり。それをつらねいへるなるへし。

において、「鶴」は歌語であるから「たづ」とこそ訓まるべきであらうのに、△訓下し▽には「つる」とある。その△左注▽には漢籍に出典のあること(実は毛詩、小雅、鶴鳴にある)を指摘してゐるから、それをふまへると「つる」でよいことになる。ともかく、△訓下し▽と△左注▽とは何れも「つる」で統一あるところに、両者の同一人たることが知れる。そして、和歌とけ別人たること、線の如き説明法によつて言へるのであつて、左注も和歌の作者と同一人物ならば決してかかる表現は生まれないからである。また、

久仁牟氣芝保古能佐紀与利都多倍玖留美太末農扶由葦計輔曾宇

礼之義（下82）

くにむけしはこのさきよりつたへくるみたまのふゆはけふそう
れしき

いさなきのみこと、あまのたまほこをさしくたして、あを
うなはらをさくりえてのち、くにくをうみて、つきにお
ほなもちのかみをうめり。みたまのふゆは、まつりするな
るへし。

において、和歌の方は「大己貴神……乃以平国時所杖之広矛」
（神代紀下）と「百姓至今咸蒙思頼」（神代紀上）との二つの記
事によったものであるが、△左注△では岐・美二神の天瓊矛の説話
を以て説明し、また、線の如き誤解があるのなどは、歌の作者矢
田部宿称公望ほどの博士にあってはあり得べきことではないのであ
る。

かくして、和歌の作者と、△訓下し△および△左注△をつけた人
物は別であり、△訓下し△と△左注△とは同一人であることが言へ
るのである。ここにおいて、元慶・延喜・天慶と三代にわたって残
存した和歌を、その文字遣をも含めて時代別に編輯し、その編輯者
がある時に△訓下し△と△左注△とをつけて、上下二巻にまとめて
成書としたのが、今日の本妙寺本日本紀竟宴和歌の原本であったと
いふことになる。

そこで、この原本の成立時期はいつか、またその編輯者はだれか
といふ問題になる。先づ仮名遣をみると、和歌の△訓下し△では、
上32かはかし（乾かし）

において、また△左注△では、

上9ゆへ（故）・22すへて（据）・27さわ（沢）・32かはかし

（乾かし）・40さかる（域）・42うるわし（麗し）・下44すへ（末）
・64そへに（其故に）

において混乱している。オとヲとは正しく書かれてゐるが、語中尾
のハ行音とワ行音とが混同されてゐるのである。ウルハシは早くか
ら「殊、于留和之」（靈異記、中、二七縁訓注）「嬋媚、宇留和
志」（新撰字鏡）の如く書かれたやうに、語彙的な遅速はあるけれ
ど、ともかく西大寺蔵本不空羅索神呪心経寛徳二年点（一〇四五）
には、「多カラム、基、種たる、覆て」などの如く、その混同がは
げしくなつてゐるから、この△左注△も一一世紀中ごろのものとも
いふこともできよう。

しかし、これだけでは編輯者は誰ともわからないのである。明瞭
に指摘できなくとも、方法としては一一世紀中ごろから、本妙寺本
写本の時代である鎌倉時代までの間で、この△左注△と関係ある記
事を採せばよいわけである。さうすると、藤原清輔（一一〇四―一
一七七）の『奥義抄』が得られる。いま、『日本歌学大系』第一巻
所収奥義抄と、『日本紀竟宴和歌』とを比較してみよう。

日本紀竟宴和歌（上3）

とひかけるあまのいはふね
たつねてそあきつしまには
みやはしめせる

このすめらのみこ、きしみ、
のみこと、し四五歳なるとき
のたまはく、わかあまつみおや
た、しきみちをおこなひて、こ
のにしのほとりをしらしめす。

奥義抄・中釈・二十六（大
系、三〇二頁）

日本紀云

このすめらのみこ、きしみの
みこと、神武天皇なり。年四十
五なる時のたまはく、わかあま
つみおやた、しき道をおこなひ
て、この西のほとりをしらしめ

その、ちはるかなるくにはなほ
みうつくしみにもうるはぬかこ
とくにしてむら／＼のきみもあ
ひきしろへり。またしほつゝの
おきなはいひしは、これよりひ
むかしにあまのいはふねにのり
てとひくたれるものある、よき
くにありと。われそこにはしめ
てみやつくりしてあまのひつき
をひろめむ。これあめのしたの
もなかなるへし。みこたちこた
へたまはく、ことわりなりと。
そのとしすめらいくさをひき
て、ひむかしをうちたまへり。
またこのすめらみこといであ
まを、をかにのほりてのたまは
く、このくにのすかたはなほあ
きつとなめせるかこくもあ
るかなと。これよりはしめてあ
きつしまのなありといへり。あ
きつはむしのなゝるへし。

す。其後はるかなる国はなほみ
うつくしみにもうたはぬが如く
してむら／＼のきみもあひきし
ろへり。又塩土老翁のいひし
は、これより東にあまのいはふ
ねにのりてとびくだれるものあ
り。よき国ありと。われそこ
はじめてみやづくりしてあまの
ひつぎをひろめむ。これあめの
したのもなかなるべし。みこた
ちこたへのたまはく、ことわり
なり。そのとしすめらいくさを
ひきめて、ひんがしをうち給へ
り。又このすめらみこといでま
して、をかにのほりてのたまは
く、此くにのすがたはなほ蜻蛉
がとなめせるかこくもあるか
など。これよりはじめて秋津洲
の名ありといへり。あきつは虫
の名也。かげろふにや。……日
本紀竟宴にこの心をよめる歌に
も、
とびかけるあまのいは船た
づねてぞあきつしまにはみ
やはじめせし
と侍り。

これを見ると、両者全く同じといってよいが、歌の因縁とは別に
最後の傍線部は△語釈▽に類するものであって、これが小異を示す
ことになる。すなはち、上段の方は簡単でかつ推量形で述べてゐる
のに対して、下段の方は断定しかつ付説してゐるのである。これ
は、『日本紀竟宴和歌』の△左注▽の方が先にあって、清輔はそれを
基にして『奥義抄』に引用補訂したことを示すものと考へられる。
同じやうなことは、上27（前掲のため、上・下段に対比するのを省
く）に対する奥義抄（大系、三四一頁、下釈、九十六）の、

む

鶴鳴九臯声聞天と云ふ文也。古歌云、

から衣したてるひめのつまこひぞあめにきこゆるたづならぬね
を

是も此心也。したてるひめはあめわかみこのめ也。そのをとこに
おくれてかなしむ声、あめに聞ゆる也。

においてもいへる。竟宴和歌の△左注▽では「つる」と訓んでゐた
のを「たづ」に改めたのは奥義抄といふ歌学書の立場からであり、
歌そのものを、傍線の如く改めた——竟宴和歌には「勢那恋曾（せ
なこひそ）」、「鶴奈良奴福波（つるならぬねは）」とあった——の
も、さうする方が歌として通りがよかったのであらう。尤も歌に関
しては、

かぞいろはいかにあはれとおもふらむみとせになりぬあした、
ずして

として「是は日本紀竟宴の歌也」（奥義抄、中釈、四十三、大系三
一〇頁）とあるが、これは西宮記（前掲、第三首）によつたもので

あらう。しかし、西宮記には「左注」の如き内容を注記した記述があったとは考へられないから、奥義抄における竟宴歌の注記は『日本紀竟宴和歌』の「左注」によって、その引用・補訂をしてゐると考へてよい。

そこで、清輔が奥義抄を書くに当って、先づ如何なる人の教導によったかに想到するとき、それはもちろん、父の藤原顕輔（一〇九〇—一一五五）であつたらう。歌学の道統を開いたのはこの顕輔であり、六条家歌学の鼻祖である。そして、この顕輔は、歌に「自注」をつけたことがあるが、それについて、

是前蹤也。日本紀竟宴歌多事。

先新院歌宴、故左京有「注被」書。世以傾之。不知也。但如此事得タル人々所為歟。

と清輔の「袋草紙」上巻、「和歌書注事」（『日本歌学大系』第貳巻、九頁）に述べてゐる。「先新院」（崇徳院）の歌宴のとき、「故左京」（顕輔のこと）が和歌に注をつけたが、これは日本紀竟宴和歌に多くの前蹤があるといふことなのである。ここにいふ「注」は本稿の「左注」のことではなく、竟宴和歌の、

上32日月乃行久星顯波可者留止毛新羅乃国波加知波可和可之
天皇
討服新羅之時、新羅重誓曰、非東日出、西河石昇、
為星辰、不乾船桅、不三春秋之朝貢。故云。

上38つ久之弊て久可多知世之爾支与支見波与与乃数めら丹つ可弊
支爾けり
国経年十三、始奉仕田呂天
皇、其後于今六代故云。

の如き、作者（上32は平惟範、上38は藤原国経）自らの注（漢文体の二行の割注を指す）のことである。この「自注」に着眼して、弥富破摩雄氏は、顕輔が自注をつけたのは、日本紀竟宴和歌に倣つたもので、このことから竟宴和歌を編輯したのは顕輔であらうと推測

されたのは炯眼であると思はれる。氏の論は『国学院雑誌』（昭和5・2、32巻2号）昭和5・11、36巻11号）に連載の「日本紀竟宴歌の研究」と題する雄篇で、この藤原顕輔説は最終の号にあるものである。わたくしの調査分析は仮名遣などを始めとして、氏の所説とはほとんど重複しないが、顕輔推定説の根拠たる「自注」については全く同感である。

さらに、氏は顕輔の歌学は、例へば伊勢物語の「みよし野のたのむのかりもひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」（十段）の「たのむのかり」を「ししがり」と解する如き誤解——藤原基俊（一一四二）も同じ——を犯すやうに、もし竟宴和歌の左注を顕輔の作だとすると、「みたまのふゆは、まつりするな、るへし」（下82の左注、前掲）の如き誤解を始めとして、他にいくつかの誤りがあるので、如何にも顕輔らしい学問の程度だといふやうなことを述べてをられる。認められる想像だと思ふのである。顕輔がどうかうしたといふ記録は無い。ただその子の清輔の著「袋草紙」や「奥義抄」が最も早くそして最も深く、竟宴歌の「左注」と関係をもち、その「左注」を或程度補訂してゐる——尤も前述「みたまのふゆ」の謬見にそのまま「奥義抄」（中釈、四十六、大系三一二頁）に踏襲されてゐるやうな例もあるが——、といふ意味で、最も身近な父の顕輔の編輯物を坐右にしたと考へるのが自然であらうと考へられるのである。

三

かくして、「日本紀竟宴和歌」の「左注」をつけた人が藤原顕輔

であるとするならば、その「左注」の文章はどういふ風にして作られたものであらうか。その内容は、もちろん竟宴和歌に対する因縁ばなしであるから、日本書紀から、また二例（上29・下64）のみは聖徳太子伝暦の資料的なものおよび伝暦そのものから採られたものであることはいふまでもないが、丹念にその文章を検討してゆくと、単にその出所の内容を摘要したものもあるが、一字一句本文を訓練していった跡が明かなものが多いのである。いま、鎌倉時代以前の、日本書紀古写本（いはゆる「古本」類）と「左注」の文章とを比較してみよう。

その方法として、先づ書紀の本文および傍訓を古写本によって写しとり、ヨコト点は平仮名で補ふことにし、次に「左注」の文章を挙げて比較することにする。

(A) 「前田本仁徳紀元年」

初天皇^{アレマヌヒ}生^{ナマ}日本菟^{ニッポン}入^{イリ}于^ニ産殿^{ウツミミヤ}。明旦^{アカシタ}普田^{フタ}天皇^{ミコ}喚^メ大臣^{オホナカ}武内宿祢^{タケナリ}語^{コト}之曰^{シテ}是何^{ナニ}瑞^{ミツ}也^{ナリ}。大臣^{オホナカ}对^{コタヘ}言^{コト}吉祥^{サカサマ}也^{ナリ}。復^{マタ}当^{マタ}昨日^{キノノヒ}臣^{ミコト}妻^{メケ}産時^{ウツミトキ}、鵜^ウ鷯^{ハシ}入^{イリ}于^ニ産屋^{ウツミヤ}。是^{コノ}亦^モ異^ヒ焉^{ナリ}。爰^{コノ}天皇^{ミコ}曰^{シテ}今^{イマ}朕^{ミコ}之子^{コノミコ}与^ト大臣^{オホナカ}之子^{コノミコ}同日^{イツニチ}共^ニ産^{ウツミ}。兼^{モトメ}有^{アル}瑞^{ミツ}。是天^{コノ}之^ノ表^{ウラ}焉^{ナリ}。以^{モトメ}為^{シテ}取其^{ミテ}鳥名^{トリノナ}、各^{オノオノ}相^ニ易^{カヘ}名^ナ子^コ為^{シテ}後^{ノチ}葉^ハ之^ノ契^{ケツ}也^{ナリ}。則^{スレバ}取^{ミテ}鵜^ウ鷯^{ハシ}名^ナ以^{モトメ}名^ナ太子^{ミコ}曰^{シテ}大鵜^{オホウ}鷯^{ハシ}皇子^{ミコ}。取^{ミテ}木菟^{キノ}名^ナ号^{ナヅケ}大臣^{オホナカ}之子^{コノミコ}曰^{シテ}木菟^{キノ}宿祢^{タケナリ}。

「上21「得木菟宿祢」の左注」

おほさゞきの天皇むまれますひつくうぶやにとびいれり。そのあしたにはんだの天皇大臣たけうちすくねをめしてのたまはくこれいかなるしるしぞ。こたへまうさくよきしるしなり。きのふおのがつまこうむときに、さゞきうぶやにとびいれり。これもあやしと。すめらの、たまはくわがこと大臣のことおなじひむまれて、ともにしるしあり。そのとりのなをかへて、みこをばおほさゞきの皇子とい

ひ、大臣のこをばつくのすくねといひて、のちのよのしるしとせんといへり。

(B) 「前田本仁徳紀四年九月」

依網^{ヨサミ}土倉^{ツクラ}阿弼^{アヒ}古捕^{コツ}異鳥^{ヒトリ}献^{ヲシメ}於^ニ天皇^{ミコ}曰^{シテ}、臣^{ミコト}每^{オノオノ}張^テ網^{ミナモ}捕^ツ鳥^{トリ}未^ミ曾^{ナラ}得^エ是^{コノ}鳥^{トリ}之^ノ類^{ルシ}。天皇^{ミコ}召^メ酒君^{サケノミコ}示^シ鳥^{トリ}曰^{シテ}、是何^{ナニ}鳥^{トリ}矣^{ナリ}。酒君^{サケノミコ}对^{コタヘ}言^{コト}、此^{コノ}鳥^{トリ}類^{ルシ}多^{オホク}在^{アル}百濟^{ハクセイ}。得^エ馴^{ナラ}而^{シテ}能^ス從^ス人^{ヒト}、亦^{モトメ}捷^{ハヤ}飛^{トビ}之^ノ掠^ハ諸^{シロ}鳥^{トリ}。百濟^{ハクセイ}俗^{ユフ}号^{ナヅケ}此^{コノ}鳥^{トリ}曰^{シテ}俱^{クニ}知^チ也^{ナリ}。今^{イマ}乃^{モトメ}授^{サヅク}酒君^{サケノミコ}令^{ミコト}養^{サカサマ}馴^{ナラ}未^ミ幾^キ時^{トキ}而^{シテ}得^エ馴^{ナラ}。酒君^{サケノミコ}則^{スレバ}以^{モトメ}韋^ヱ縵^{マン}著^{ツケ}其^{ソノ}足^{タビ}以^{モトメ}小^コ鈴^{スズ}著^{ツケ}其^{ソノ}尾^ビ、居^ス腕^{ウデ}上^ノ献^{ヲシメ}于^ニ天皇^{ミコ}。是^{コノ}日^ヒ幸^{マカ}百舌^{ヒツコ}鳥^{トリ}野^ノ而^{シテ}遊^{アソブ}。時^{トキ}雌^メ雉^{トリ}多^{オホク}起^{タチ}。乃^{モトメ}放^{スル}鷹^{タカ}令^{ミコト}捕^ツ。忽^{スル}獲^エ数^{オホク}十^{ジュウ}雉^{トリ}。

「上22「得土倉阿弼古」の左注」

おほさゞきの天皇のみよに、つちくらのあびことりをとらへてたてまつりてまうさく、つねにあみをはりてとりをとらふるにかゝるをばえざりつと。すめらさけのきみをめしてとひたまふ、これなにとりぞ。こたへまうさく、このとりくだらにおほし。ならしえてとりをとらしむ。かのくにのひとこれをくちといふ。すめらさけのきみにたまひてかひならさしてたまふに、いくばくのほどをもへずして、をしかはのを、あしにつけ、ちひさきすゞを、につけて、たゞむきのうへにすへてたてまつる。そのひすめらもずの、にいでましてあまたのきじをとらしめたまへり。これいまのたかなりといへり。

(C) 「前田本仁徳紀四年二・三月」

四年春二月……詔^{ミコト}群臣^{タタヘ}曰^{シテ}、朕^{ミコ}登高台^{タカノダイ}以^{モトメ}遠望^{トウボウ}之^ノ烟氣^{エンキ}不^ス起^{タチ}於^ニ域中^{イキナカ}、以^{モトメ}為^{シテ}百姓^{ヒヤクシヤ}既^{スレバ}貧^{ヒナシ}而^{シテ}……(三月)至于^{マデ}三載^{サンサイ}悉^{スベテ}除^ヘ課役^{カセツ}息^ノ百姓^{ヒヤクシヤ}之苦^ク……是以^{モトメ}宮垣^{ミヤノキ}崩^{クニ}而^{シテ}不^ス造^ツ……風雨^{フウウ}入^{イリ}隙^{マタ}而^{シテ}沾^シ衣被^{イヘ}、星辰^{ホシノ}漏^{モロ}壞^ヘ。

而露床アラハにミユカミマシキを。是後風雨順時……百姓富寛……七年夏四月……
天皇居台上而遠望之マシシタカトノにミソムタマフに。烟氣多起……曰朕既富矣。……八十
七年……

「上40「得大鵬鵠天皇」の左注」

このすめらしくにしろしめすよとせといふに、たかどのにのほりま
してとほくのぞみたまふに、さかゝのうちけぶりたゝざりければ、
たみのまづしきなりとおもほして、みとせみつきものはたらず、つ
かふことなくしてめぐみたまへり。またみやつくりもせられざりけ
れば、あめかぜいりておほむぞをうるほし、ほしのひかりもりてみ
ゆかもあらはなり。その、ちあめかぜときにしたがひて、たみとみ
ゆたかなり。またおなじきなゝとせに、たかどのにましてのぞみた
まふに、けぶりおほくたてれば、のたまはく、われすでにとみぬと。
おほよそたかつのみやにしてくらゐにますこと八十七年といへり。

(D)「前田本仁徳紀一二年七・八月」

高麗国貢鉄盾鉄的のタラ。八月庚子朔己酉アヘタマフ。高麗客のマシタにミカトに於朝のツトヘテ。是日集
群臣及百寮令射高麗所献之鉄盾的モモツをヒトヒト。諸人不得通イトハスこと。唯的イフハノ臣祖
盾人宿祢鉄的通焉のトホ。時高麗客等見之畏其射ユミイルコトノスラタを之勝功を、共起以
拜朝ミカトヲウケミスフルシホフ。明日美盾人宿祢而賜姓ミカトヲウケミスフルシホフ名曰的戸田宿祢イフハ。

「下70「得的戸田宿祢」の左注」

おほさきの天皇のみよに、こまのくにくろがねのたて・くろがね
のまとをたてまつれり。かのくにのまらうどにあへたまふひ、ま
きむたちをつどへてそのまとをいさしめたまふに、いとほすことな
し。たゞたてのすくねいとほせり。こまのまらうど、このゆみいる
ことのすぐれたるをおちてともにみかどをかみす。これによりて
あくるひかばねをたまひて、いくはのとだのすくねといふ。

以上前田本仁徳紀と△左注▽とを較べてみるに、△左注▽が書紀
本文における漢文体の助字を不読にし、或いは主語を省き、或いは
二文以上を接続助詞によって一文化するなど△和文化▽の努力を払
つてゐるが、概して書紀本文を忠実に訓読してゐるといへるのであ
つて、しかも前田本の古訓と大差が無い訓読を施してゐることが認
められるのである。いま、そのことを示すために、前田本訓との異
同において、同じ訓を――線、異なる訓を――線で表はしてみた。
さて、ここで、特に(B)において、前田本に「土倉阿弭古」とある
が、△左注▽も「つつくらのあびこ」とある点が問題になる。「西
宮記」にも「土倉」とあった(前掲)。これを北野本に徴するに、
「依納土倉阿弭古」とあって、「土」の左に「屯」とある。この傍
訓ミヤケのあり方からみると、「屯倉」とあった本によって注記
し、訓をそれによってミヤケに改めたものと思はれる。因みに北野
本仁徳記は卜部兼永筆(室町時代、永正一六年△一五一九▽から天
文五年△一五三六▽の間)である。すると、今日でこそ、「依納屯
倉」といふ如く本文校訂をしてゐるが、これは歴史学的にみでさう
であらうが、少くとも室町時代までは「土倉」の文字で写されてき
たことは明かである。従つて、「土倉」は、西宮記・前田本・日本紀
竟宴和歌の△左注▽を経て、長い生命をもつてゐたことになる。
尤も、国史大系本『日本紀略』(前篇、五、八一頁)には「依網
屯倉」とある。この書の成立年代不明ながら、もし後一条天皇長元
九年(一〇三六)の成立とすると、「屯倉」とあった日本書紀の写
本が存在したといはなければならない。国史大系本の「屯倉」が正
しく翻刻されたかどうか不安であるが、それを認めると、「茨田
屯倉」などと同様「依網屯倉」の存在が考へられる。従つて「屯

倉」が正しいとすれば「土倉」は誤写となる。しかし、たとひ「誤写」にしても、西宮記や前田本仁徳紀や日本紀竟宴和歌の「左注」をつけた人——上述に従へば藤原顕輔——は、少くとも前田本仁徳紀の写本類を見てゐるといふことは確かなことになるであらう。

次に、前田本雄略紀と宮内庁本雄略紀と、「左注」と重なるものについてみよう。この巻は両古写本訓はヨコト点を含めてほとんど差が無い。それで前田本を主にし、宮内庁本によるときは（ ）で示すことにする。

(E)「前田本・宮内庁本雄略紀九年七月」

天皇射獵於葛城山。忽見長人。面貌容儀相似天皇。天皇知合是神猶故。問曰、何処公也。長人對曰、現人之神。先稱王諱。然後、應道。天皇答曰、朕是幼武尊也。長人次稱曰、僕是一事主神也。遂與盤于遊田。駢逐一鹿。相辭。發箭。並轡。馳。言詞恭恪……
日晚田罷、神侍送。天皇至來目水。

〔上36「得大泊瀬天皇」の左注〕

この天皇かづらきやまにかりしたまふに、たきたかきひとあへり。かほすがたすめらに、たてまつれり。すめらかみとしろしめせれどもとひてのたまはく、いづこのきみぞ。こたへていはく、あらひとかみなり。まづみなをなりのたまへ。のちにわれといはむと。すめらこたへてのたまはく、われはわかたけのみことなりと、つぎにかみなのりていはく、やつかれはひとことぬしのかみなりとて、ともにかりのあそびして、ししをおひて、やはなつことをゆづり、むまのくちをならべ、はしらし

めて、ことばるやまへり。ひくれ、かりやみてかへりますに、このかみくめかはまでにおくりたてまつれりといへり。

(F)「前田本・宮内庁本雄略紀一二年一〇月」

天皇命木工斗鷄御田……始起合樓閣。於是御田登樓疾走四方有若飛行。時有伊勢采女仰觀樓上侘彼疾行。願仆於庭覆所擊饌……天皇便疑御田妬其采女自念將刑而付物部。時秦酒公……欲以琴聲使悟於天皇。橫琴彈……天皇悟合琴聲而赦其罪。

〔下50「得秦酒公」の左注〕

わかたけの天皇ひだのたくみ、たにおほせてたかどのをつくらしめたまふ。みた、かどのにのぼりてとくはしること、ぶがごとし。これをいせのうねあやしみるほどに、にはにたふれてさげたるみけつものをこぼしつ。すめらうねべをみだりをかせるかとうたがひてころさんとするときに、さけのきみことをひきて、そのころを天皇にさとらしめて、つみをゆるさしめたり。

(G)「前田本・宮内庁本雄略紀二二年七月」

丹波国余社郡管川人瑞江浦嶋子乘舟而釣遂得大亀。便化為女。於是浦嶋子感以為婦、相逐入海到蓬萊山歷觀仙衆。

〔下53「得浦嶋子」の左注〕

わかたけの天皇のみよに、丹波のくによきのこほりのつ、かはのひと、みつえのうらしまのこふねにのりて、つりするときにおほいなるかめをえたり。そのかめをむなとなれり。うらしまのこめ、これをめとして、ともにわたにいりて、とこよのくに、いた

りて、ひじりにあふといへり。とこよとは蓬萊、ひじりとは仙をいふ。

田〔前田本・宮内庁本継略紀九年七月・一七年三月〕

河内国言、飛鳥戸部人田辺史……伯孫聞女産……見往

賀、聖家而月夜還於蓬萊丘、賀田下……逢騎赤駿

者、其馬時……電……視而心欲之……所乘

馬、馬齊頭並……乃赤駿超……不可復追。其乘駿

者知伯孫所欲、仍停換馬相辭、取……別……甚歎

驥而入厩解鞍、秣馬眠之。其明日赤駿變為土馬、取

伯孫心異、之還覓營田、乃見驕馬在於土馬之間、取

而代而置所換土馬也……〔十七年三月〕……詔土師連等使

進五志三盛朝夕御膳清三器者、於是土師連……進抵津國

山背國……伊勢國……及丹波伯馬因幡私民部名曰贊土

師部。

〔下55「得田辺伯孫」の左注〕

わかたけの天皇のみよに、かうちのくにのまうせる、あすかべのこほりのひとたのへの伯孫、むすめこうむとき、てむこのいへにゆきて、つきよにかへるときに、ほんだのみさ、きのもとにあかきむまにのれるひとあへり。そのむまたつのごとくにひる。これをみてこゝろにねがひてわがのれるみだらをのむまにむちうちて、ならべはしらむるに、あかむまこえのびておよびがたし。そのゝれるもの伯孫がこゝろをしりて、むまをかへてわかれさりぬれば、よろこびてむまやにいりてくらをおろし、まぐさをかひてぬぬ。そのあしたにあかむまはにむまとなれり。あやしみてさらにほむだのみさ

きにもとむるに、わがみだらをのむまあり。それにとりかへてかへれりといへり。この、ちおなじきすめらはにしのむらじにみことのりして、あしたゆふべのみけつものもるべきうつはものをたてまつらしむ。それよりはにしのむらじ、つのくに・やましろ・いせ・丹波・たちま・いなばのわたくしのたみをたてまつりて、にへのはじべといへり。

〔I〕〔前田本・宮内庁本継体紀二年六月・八月〕

筑紫磐井反、掩……〔八月〕汝俱征、物部麿鹿火大連。

〔下65「得物部麿鹿火大連」の左注〕

をふとの天皇のみよに、つくしのいはるそむけり。すめらあらかひのむらじをつかはしてうちたひらげしめたり。

以上をみるに、前田本（平安中期書写）と宮内庁本（平安後期書写）とは同系であること明かであり、A左注Vの文章はこれらによく合ふことも前述と一致する。尤もGの「大亀」を「おほいなるかめ」と訓み、田の「雲」を「ひる」と訓むあたりは左注者の作為——前者は文字通り訓み、後者は「童雲」（欽明紀七年七月）を覚えてゐたか——のせるか、或いはそのやうな訓のある古写本を底本としてゐたかわからないが、時代的にみて、ともかく前田本的な書紀古写本を座右に置いてゐたものと思はれる。

特にIにおいて、A左注Vは継体紀の記事を忠実に訓読したものではなく、その摘要に過ぎないが、「麿鹿火」を「あらかひ」と訓んでゐる点に注意すべきである。これは、前田本継体紀元年春正月に「物部麿鹿火」とある——宮内庁本は損傷のため傍訓のある例が無い——が、江戸期追補になる北野本では「物部大連麿鹿火……鹿

鹿火^{カホ}」(六年冬十二月条)とあり、寛文版も然りである。このやうに卜部家本系統ではソカホであるとする、それ以前の古本系では恐らく正しくアラカヒと訓まれてゐたことになり、それがまた左注Vにおいても正しく訓まれる結果になつてゐるわけで、結局左注V者は前田本と同類のものをみてゐたと考へてよいことになる。考へられるのである。

四

日本書紀の講筵は、諸書によると、養老・弘仁・承和・元慶・延喜・承平・康保の都合七回あったと伝へる。承平六年度の竟宴は天慶六年といふのが『日本紀竟宴和歌』の目録に掲げるものである。さて、いま各々の講筵の有無その他についての検討はさて置くとして、この伝へは、平安時代前期(九世紀)一〇世紀の中ごろ)すなはち律令政治の時代——この意味で奈良時代を含め得る——に講筵が開かれ、平安時代中期(一〇世紀の中ごろ)一一世紀の後半)すなはち摂関政治のはじめごろにそれが終つてゐることを示してゐる。この間には、無訓点の田中本・神紀その他の断簡があり、平安前期の末には岩崎本・推古紀・同皇極紀の付訓本が残存してゐる。さうすると、平安中期の中ごろ、また後期(院政時代)一一世紀の後半)一二世紀の終りまでV)に至つても書紀の講筵が開かれなかつたといふことは、律令政治においてこそ日本書紀は一つの指標ともなつたが、後にはその必要が無かつたともいへるが、一方では平安前期から中期のはじめの間に、書紀の訓読上のいちおうの固定をみたために講筵の意義を認めなくなつてしまつたのではないかと思はれる。そして、例へば藤原教通(一〇七五没)所持本(前田本・敏達紀)の如き書紀古写本が実在するやうに、平安中期・後期に

は貴族や紀伝道の家また神祇伯家に伝へられるやうになつたのが、中期の末の書写と謂はれる前田本、またそれと同系の宮内庁本(雄略紀・継体紀)△平安後期書写V、また北野本第一類(推古紀・舒明紀・皇極紀・孝徳紀・斉明紀・天智紀)△平安後期のはじめ書写Vといふことにならう。この北野本の推古・舒明・皇極の三巻は宮内庁本のそれと同系といふ(日本古典文学大系本『日本書紀』上、三二頁)。このやうになると、今日残存している古本系の書紀古写本は、それぞれに類同の付訓があるわけで、しかも前期末の岩崎本ともさほど隔離を示さないといふことは、ますます、平安前期から中期のはじめにおいて訓読上のいちおうの固定をみてゐたと考へることを助けるであらう。

今日でこそ、わたくしたちは書紀古写本の△古本V類が、各々三十巻揃つてゐないことをみて色々な面で不安を感じるのであるが、当時はそれぞれ全巻揃ひであり、また全巻にわたつて付訓(ヲコト点をも含めて)されてゐたであらうといふことは想像するまでもないが、卜部家系統本の出現(鎌倉以降)のことを云々する以前に、わたくしはこの『日本紀竟宴和歌』及びその△左注Vの存在をみて、そのことを言ひ得ると思ふ。いま、その分布表を示さう。番号は歌の番号である。漢数字は書紀の巻序。二巻にわたる場合もある。

一	神代上	4	7	13	17	23	28	69	83	(断簡あり)
二	神代下	8	12	15	27	44	67	82		
三	神武	3	5	9						
四	綏靖	×								
五	開化	×								
六	崇神	34								
七	垂仁	76	80							
八	成務	35								
八	仲哀	×								

九	神功	32	
一〇	応神	38 39 41 61 72 74	(田中本・宮内庁本、但し付訓点無し)
二	仁徳	21 22 40 70	(前田本)
三	履中 反正	42	(宮内庁本)
三	允恭	41 60	
四	雄略	36 50 53 55	(前田本・宮内庁本)
五	清寧	×	(宮内庁本)
六	仁賢	×	(宮内庁本)
七	武烈	×	(宮内庁本)
七	繼體	19 65	(前田本・宮内庁本)
八	安閑	×	
八	宣化	×	
九	欽明	18 25 26 73	
一〇	敏達	11 59	(前田本)
二	用明	33 37	(宮内庁本)
三	崇峻	29 37	(岩崎本・北野本・宮内庁本)
三	推古	×	(北野本・宮内庁本)
三	舒明	×	(北野本・宮内庁本)
四	皇極	×	(北野本・宮内庁本)
五	孝徳	20	(北野本)
六	斉明	×	(北野本)
七	天智	30 77	(北野本)
八	天武上	31	
九	天武下	×	
一〇	持統	×	

×印は竟宴和歌が無い巻々である。これは今日からみても詠歌対象にならぬと思はれる巻であるものが大部分である。従って和歌が無いのであらう。興味を覚えた題材に対しては二人以上が詠じてゐることと較べてそのことが言へる。或いは編輯漏れのものもあった

であらうといふことは、新古今集以後に採録された竟宴和歌が、『日本紀竟宴和歌』所収のものと異なるものもあることから言へる。このやうな事情のもとに、全巻に和歌が残されてはゐないが、それでも三十巻中二十巻まで和歌をもつてゐる、従つて△左注Ⅴも精粗まちまちとはいへ存在するといふことは、左注者が書紀三十巻をひとわり見てゐたといふことを想定せしめるであらう。

ところが、この左注者を平安後期のはじめの藤原顕輔とすれば、この藤原家に幾種類もの書紀古写本が存在してゐたとは先づ考へられない。すると、前述から推してゆけば、恐らく前田本的な書紀古写本三十巻が彼の家に伝来して、それに依拠して△左注Ⅴをつけていったものであらうと考へられるのである。その古写本にはもちろんコト点を含めた付訓があつたことは、上述訓読の比較から言へることであつて、この種の古写本であつたればこそ、彼も容易に書紀の訓読が可能であつたと言へよう。彼の△左注Ⅴの記述の方法は、多少の速断誤解はあるけれども、一つには書紀の本文を忠実に漢文訓読の方法によつて訓んでゆくといふ△直訳式Ⅴ記述と、もう一つはそれを今度は多少歪曲して和文化しようとする△意訳式Ⅴ記述の二つの方法を用ゐてゐるのである。

このやうな方法でもつて、彼に書紀本文の訓読がなされたといふことは、すでに平安前期から中期のはじめにおいて書紀の訓読の固定化がほぼ成功し、その訓読結果が、平安中・後期において、古写本に記入され、それが由緒ある学者の家柄や貴族の家柄に伝へられてゐたことを物語るものであると考へてよいのである。だからこそ、その訓法に随つて、書紀は訓めるやうになつてゐたのであり、さらにそれを和文化して、われわれが中古の物語を読むのと大差ないやうな△左注Ⅴの文章をものすゆとりもできてゐたのであらうと考へられる。

総じて、日本書紀私記や各古写本の訓、そして寛文版の傍訓を比較して、その異同を検するとき、異なることに対する見通しへの解釈はそれなりに重要であるが、むしろ同じであることの数量的な多さの方がより重要であって、平安前期から中期のはじめといふかなり早い時期に書紀全巻がいちおうは訓めるやうになってゐたのだとい

ふことが、『日本紀竟宴和歌』の八左注Vを検することによって言へるのではないかといふことを述べたのである。
左に理解の便のために必要な年表を掲げておく。

昭和四二年一月一九日稿了

——皇学館大学教授——

世紀	区分	天皇	年号	事項
8 800 9 850 9 900 10	平安前期 (律令政治)	桓武 陽成 醍醐 〃 〃	794 (延暦13) 882 (元慶6) 906 (延喜6) 917 (〃 17) 930 (延長8)	平安京に奠都 [田中本] 元慶竟宴和歌 延喜竟宴和歌 <藤原忠平, 上29> 聖徳太子伝暦成る ア行・ヤ行のエの書分けあり [岩崎本]
950 10 1000 11 1050 11	中期 (摂関政治)	朱雀 円融 一条 後一条 後朱雀 白河	939 (天慶2) 942 (天慶6) 982 (天元5) 1017 (寛仁1) 1045 (寛徳2) 1075 (承保2)	天慶の乱 天慶竟宴和歌 <源高明, 下77> <藤原師尹, 下64> 西宮記 枕草子 藤原道長, 太政大臣 源氏物語 ハ行・ワ行の混同 (西大寺藏本不空羅索神呪心経) 藤原教通没 (80歳) [前田本]
1100 12 1150 12	後期 (院政)	堀河 後白河 高倉	1086 (応徳3) 1155 (久寿1) 1177 (治承1)	院政始まる 藤原顕輔没 藤原清輔没 (奥義抄, 袋草紙) 〔北野本第一類 宮内庁本〕
		後鳥羽	1192 (建久3)	源頼朝, 幕府